

「地方創生カレッジ in 越後妻有」 ワークショップ等の成果のポイント

1. 地域課題・テーマ

テーマ:

新潟・越後妻有地域に点在する“集落”の持続可能性に向き合い、課題と解決策を提言せよ

テーマ設定の背景:

「各チームが地域に入り込んだ際、どのような課題設定をするか」というプロセスを重視するため、参加者がミッションの文言にこだわって提案をしなければならない、という進行はしておらず、ミッションは解釈の仕方によってどのようにも取れる文言としている。

2. 現地ヒアリングを通じ参加者が認識した現状と問題点

(1) チームA: 20代前半で市内から職業を理由に転出しているが、いずれは帰ってきてほしいと思う人も半数いる。地元を飛び立つ前に、いつか地元に戻ってきたいと思ってもらえる意識醸成をすることで、地元に戻るという行動を促せないか。若者が地域に戻れる環境を整える必要がある。

(2) チームB: 芸術祭に関わった(運営側、参加側の)人は人と交流することで、ハッピーな状態で生活ができている。しかし、芸術祭の期間を除き、人と人が交流する場は少ない。運営側の多くは60歳以上であり、健康に不安を抱える。芸術祭に関わる人が限られており、芸術祭に関わっていない人は十日町は身近でない。運営側の身体的負担のため、関わり続けるのは難しいが、運営側に新しい人が参加しないことが問題となっている。

(3) チームC: ①今後財政運営がこれまで以上に厳しくなる中、より自助・共助が求められていく②市街地の住民と集落の住民の距離感がある。十日町市+津南町全体で約6万人の人口を抱え、決して少なくはない一方で、市街地住民と集落の住民には距離感があり、域内でも十分に人の交流がされていない③そもそも、日本全体が人口減少しており、全国どこの限界集落も課題感は似ていて、施策も似通った発想になるため縮小社会において人の奪い合いになっている。中長期的には可能な限りの自助・共助を前提に、域内・域外からの人の交流を生む、そこに住む人らしさに立脚した施策が必要ではないか。

(4) チームD: 担い手不足、自分の集落は自分たちでなんとかしようという責任感、どこに声を掛けたらいいのかわからない閉塞感、なんとなくの「終わり」を予期している。各集落内でのつながりは強い一方で、単一のコミュニティではできることに限界がある(人、アイデア)

(5) チームE: 地域への愛着や帰属意識の希薄化ゆえに離れ、結果、“集落の想い”が途絶える。若者が集落の魅力・歴史・想いに触れていない、集落への想いをもつ人との顔の見える関わり、生き様を伝え想いを継承する機会が足りない現状がある。

(6) チームF: すべてではないが、集落の閉じられた環境下でのしがらみや義務感、しぼりがある。これは閉じられた環境の中にいる人にはわかりにくい、外の人を感じる感覚である。集落には変化したい人も変化したくない人もいる。どちらも根底には守りたいものがあるという想いはあるが、よく分からないなどの理由で同じだと思われていない。

「地方創生カレッジ in 越後妻有」 ワークショップ等の成果のポイント

3. 目指すべき方向性・将来像と実現に向けた具体的施策

(1) チームA: プロジェクトを起点に既存集落の持続性に加え、新たな集落(コミュニティ)が生まれる状態を目指したい。ステップ1として仕組みの磨き込みを行う。プロジェクトを立ち上げ、実行し、振り返りと改善を繰り返す。ステップ2としてターゲット範囲を拡大する。中高生など子供世代を巻き込むことで、親世代(30-40代)に広げていく。ステップ3として、新たな集落(コミュニティ)を確立する。プロジェクトで繋がった人同士の新たな集落ができていく。

(2) チームB: より多くの人々が十日町の魅力を知り、十日町とつながりを持つことで、ハッピーな状態が続くことが理想。芸術祭前は十日町の文化の象徴であった「着物」に焦点を当て、その着物の文化を通じて十日町とつながる人を増やす。着物(を基に繰り広げられている人の営み)を知り、着物(人)に関心を持つ人が十日町(人)を訪れ、十日町市に来た人がハッピーになり、十日町市とつながりを持つ人が増えることで十日町市の(人)もハッピーになるストーリーを実現する。

(3) チームC: 十日町市街地や全国から村長と村民を募り、集落の想いを継承し、特色ある村の創造を行う。住民自治を前提とした担い手=村民の確保を行う。行政の支援は今後縮小することを念頭に、ゆくゆくは自立して暮らすことを前提とした村長・村民を募集する。また、村長が集落に入っていくプロセスで、集落の個性や良さを発掘・再認識し、村づくりの土台としていく。そして、多様なライフスタイルを前提とした人の流れを生む。本格移住、2拠点居住や、一時的な居住など、関わり方を選べることを前提とした、流動的な人の流れをつくる。

(4) チームD: 理想状態は以下の2点。①集落の枠を超えた交流から、課題解決のヒントをさぐる。②自分の地域にある資源や価値をコミュニティの外の視点で見出し、互いに刺激しあう。具体的には、複数のコミュニティをつなげる土台(ハード&ソフト)となるものが必要。a: 地域内を走り、人・物・情報・楽しみを運ぶ「結遊ワゴン」b: 若者の第2のふるさとづくり「十日町留学」c: aとbの集大成の発表の場であり、一同が集まる「六集落祭」

(5) チームE: 集落に愛着を持ち、集落が続くよう行動する人たちが増え続けることが理想の状態。そのために、産官学でビジネスを共創する「高校生ポップアップストア」を行う。国の助成金を活用しつつ、商工会と行政がタッグを組んで実施する。

(6) チームF: 無関心な集落の人を巻き込むために、笑顔で写真が撮れるボックスを作成し、その写真でコンテストを開催する。また、地域の若者を巻き込むために、若者が地域をより良くするアイデアを考え、地域に発表する。そして、十日町の集落を知らない人も巻き込んでいく。十日町外の人々が来たくするような場所やイベントを作る。

4. 今回のワークショップやディスカッションを通じて得た気づき(官民連携、人材交流の効果等)

本プログラムにおいては、所与の課題に対する解決策を提案する趣旨ではなく、地域に入り込み、参加者それぞれの視点で課題設定を行い、チームで提案を練り上げた。結果として課題設定から取り組むことは、提案者がなぜ提案を行っているのかなどの講評者からの問いかけにつながり、参加者は主体性の在り方を問われた。このことで提案に対する主体性の喚起や自分自身が取り組みたいことがなにかを改めて考える機会となった。

「地方創生カレッジ in 越後妻有」 ワークショップ等の成果のポイント

5. 成果スキーム図

